蛇いちご

宮原晃一郎

青空文庫

林の中に行つてみると、紅のいろをした美しい蛇いちごが生つてをります。「蛇いちごを食べてはいけないよ。あれは毒ですからね。あれを食べると、体は溶けて水になつてしまひますよ。」

お母さん達はかう子供に教へます。恐しい毒な蛇いちご、みかけは大変美しくて、人の体をとかしてしまふ蛇いちご。本当にさうなんでせうか？　私は知りません。けれどもこんな話がつたはつてをるのです。

日本のずうつと西の端の或国では、氏神といつて、どこの家でも、先祖代々自分だけの神様を祀つてをります。その祭礼は十一月で、一年に一度神職をよんで、神棚に七五三縄を張り、御燈明をつけて、祝詞をあげて貰ひます。そして親類の者や、近所の人達を呼んで御馳走を致します。子供達は甘酒や御赤飯がふるまはれるので、氏神祭りといへば、楽しいものゝ一つです。

ある時、一人の神主さんがありました。矢張りこのお祀りによばれて方々を祝詞を上げて歩いてをりました。ところが、よばれて行つた先で出す御礼は玄米一升に、一厘銭十三ときまつてをりました。至つて僅かなものです。けれども御馳走だけはうんと出ますが、一人で一日四五軒も行くのですから、とても出された御馳走をみんな食べるわけにはいきません、といつて

持つて帰ることも出来ないので、大変残念に思つてをりました。

「どうにかして、皆でなくても、出されたものを大てい喰べつちまうことはできないかしら？」

ぼんやりと考へながら、或日神主は、谷の傍の山道をうろ〳〵としてゐますと、一疋の大蛇が向うへ出てきましたので、びつくりして、そこの岩陰にかくれてをりますと、大蛇は神主のゐることを知らないものゝやうに、大きなお腹をかゝへて、だるさうにして、谷のふちの辺を何やら捜してをりました。神主さんは恐いけれど、何をするのだらうと、不思議がつて見てをりますと、大蛇はそこにあつたものを何やら二口三口たべて谷へ下りて行きました。神主さんがそつと覗いてみると、大蛇は谷川に下りて行つて、水を飲んでゐるのでした。水を飲み終ると、大蛇は向うの岸に上り、大きな松樹に身を巻きつけ、一つじつと締めると、見る見るうちにお腹はげつそりと小さくなつて、勢よくどこかへ行つてしまひました。

神主さんは岩の陰を出て、蛇が何やら喰べたところへ行つてみますと、そこには美しい蛇いちごが、もう霜にしなびて残つてゐました。神主さんは「しめた。」と、手を拍つて悦びました。それはかういふ話を思ひ出したからでした——

「蛇が腹一ぱいに物を食べると、蛇いちごを食べ、水を飲んで、立木に巻きつく。さうするとお腹の物はすつかりと消化れてしまふ。けれども亀を呑んだときだけにはそれがきかないさうだ。どういふわけかといふと、亀は堅い甲羅を着てゐるから、蛇いちごもきかない。亀は呑まれる直ぐ、首も手足もちゞこめてゐるが、蛇が水を呑むと、元気が出て、お腹の中で、首や手

足を出して荒れまはる。蛇は苦しいから、立木にまきついて締めると、亀はその手足の爪で、蛇のお腹をガサ〳〵引掻いて、とう〳〵その腹を裂いて、出てしまふ。」といふ話でした。

「しめた〳〵。」と、も一度神主さんは叫びました——

「この蛇いちごをもつて行かう。そして祝詞を上げてゐるうちにそれをたべては、水を飲んでをらう。さうしたら直ぐお腹があの蛇のやうにすいて、どこへいつてもありつたけの御馳走がたべられる。」

神主さんはそこらぢうを捜して、沢山蛇いちごを集めて袂に入れて、いそ〳〵と氏子の家へ行きました。

さて神主さんは神前に出て、祝詞をあげながら、

「かけまくも畏き……ムニヤ〳〵、大神の大前にムニヤ〳〵……。」と、ちつとづゝ蛇いちごをたべては、お水をいたゞいてゐますと成程どうも不思議にお腹がすいて来ます。そして祝詞が終る頃にはもう飢じくて〳〵気が遠くなる程になるので、出された御馳走を、まるで餓鬼のやうにがつ〳〵がぶ〳〵と喰べたり、飲んだりして、

「マアこれでよろしい。」と、ほく〳〵悦びながら、二軒三軒と廻つてあるいてゐるうち、段々と眠たくなつて来ました。

「どうしたものだらう。あんまり喰べ過ぎたせいかしら。」

神主さんはお腹のへんをさすつてみますけれど、お腹はげつそりとしてをります。寧ろ狼のやうに腹が背骨にくつゝいてをります。そしてその飢じいことゝいつたら、何ぼたべても追ひ付きません。

「神主さんは、御病気ぢやございませんか、大層お顔がお痩せになりましたが。」

或家ではかう言はれました。

「いゝえ、どう致しまして。……たゞ余り遠いところを急いでまゐりましたので、お腹がすいたのです。」

神主さんは情ない声を出しました。心のうちでは——

「どうやら、これは蛇いちごが利きすぎた。」と、思つてゐますがそんなことは言はれません。

「おや、それぢや何か召上るものをさし上げませう。」

そこの家では先づ御馳走から出しましたので、神主さんはがつがつと四人分もたべて、大きなお腹をかゝへながら、やつこらせと、神前に坐つて、ムニヤ〳〵と祝詞をあげ始めました。

家の者どもは神主さんが余りに意地汚く喰べたのに驚いてをりました。

そのうちに奥の方で祝詞をあげる神主さんの声が段々と低くなつて、とう〳〵しまひには聞えなくなりましたので、不思議に思つて、そこの奥さんが行つてみました。すると神棚の前には神主の坐つてゐたところに、その衣物やら、袴やらがあります。それもちやんと人が着てゐたまゝで、丁度その中から身体だけを引つこ抜いて取つたやうになつてゐました。変なことも

あるものだと、家の人達を呼んで、捜してみても神主さんの姿はどこへ行つたか見えません。衣物や袴をといてみますと、そのあとには水が沢山溜つてをりました。そして衣物の袂から、蛇いちごが四つ五つ出てきました。そのときそこへ来合せてゐた百姓の十袈裟といふ男がそれを見付けて、かう申しました。

「分りました。神主さんは溶けて水になつてしまつたのです。」

「それはどういふわけです。」と、皆が聞きかへしました。

「御覧なさい。」と、十袈裟は蛇いちごをさして申しました。

「この蛇いちごを神主さんはたべたにちがひありません。私が山の畑に行きますと、時々大きなお腹をした蛇が出て来ます。そして蛇いちごを喰べては水を飲みますと、すぐそのお腹がげつそりと減るのです。神主さんはきつと蛇がさうするところを見て、自分もお腹をすかしては、御馳走を沢山たべてやらうと、きたない心を起したにちがひありません。相憎と蛇がたべればお腹がへるけれど、人間がたべれば、その身体までが溶けてしまふのです。なぜかといへば、蛇は人間を呑んだときにも、矢張り蛇いちごを喰べて、それを溶かしてしまふのですからね。」

そこの人達は成程と思つて、衣物と袴とを使にもたせて、そのことを神主さんの家へ言つてやりました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第一一巻」ほるぷ出版
　　1978（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「竜宮の犬」赤い鳥社
　　1923（大正12）年5月
入力：tatsuki
校正：鈴木厚司
2005年8月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蛇いちご

宮原晃一郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/